

「順口溜」について

文 楚雄ⁱ

中国語には「順口溜」ということばがある。本論はこの「順口溜」について論じている。「順口溜」は古くからのことばではなく、比較的新しいものである。ほぼ同一意味に使われる古いことばとしては「歌謡」「民謡」などがある。これらのことばは意味的にはそれぞれ微妙に違う。しかし、使用の現場では必ずしもその区別を明確にして使っているとは限らず、混同して使うのが一般的である。本論ではこのような現状を踏まえて「順口溜」の定義、「順口溜」が指している内容、近似していることばとの違い、古代、近現代「順口溜」の作品、古代から一貫した「順口溜」の特徴などを明らかにしていくことをねらいとする。

キーワード：順口溜，歌，謡，歌謡，民謡，当世ざれ歌，流行り謡，楽府

1. 序

1-1 「順口溜」大量創作の背景

中国語には「順口溜」ということばがある。これは決して古いことばではなく、比較的新しいものである。日本語に置き換える時にはなかなか適切なことばは見つからない。本論では「順口溜」を当世ざれ歌と訳することにする。この「順口溜」は1980年以降に前例のない速いスピードで大量に創作され、大流行し始めていた。この背景には1980年代以降中国の社会は大きな変化が起きていたからである。ご周知の通り、1980年以来中国の経済は世界を驚かせるような急成長を成し遂げ、高成長率は30年も続いている。国民1人当たりの国内総生産は1980年の674元であったのが2013年の41,826元までに成長し、33年間でなんと約62倍も伸びていたのである¹⁾。さらに地域的に見てみれば、もっとも伸びている都市

の1つである深圳市では2013年度の1人当たりの国内総生産は136,947元（22,112米ドル）に達している²⁾。このような急速な経済成長は大いに評価すべきことであろう。

しかし、他方、この急速な経済成長の反面に中国の社会には大きな歪みが生じ、数多くの新たな社会問題を抱えるようになってしまったのも否定できない事実である。収入格差の拡大、官僚役人の腐敗、拝金主義の蔓延、環境汚染などがその社会問題の典型的な例である。官僚役人の腐敗だけを見ても、その数や量が言語に絶するほどのものばかりである。2012年11月に開かれた第18期党大会で報告された中国共産党中央紀律検査委員会の報告書によると、2007年11月から2012年6月までの5年間だけでも、全国の紀律検査機関が立件した役人の汚職・腐敗などの案件はなんと64万3000余件にも上る。党紀により処分された人は66万8000人にも上る。司法に送検されたのは24,584人にも上るという³⁾。また近年のメディアなどで取り上げられた腐敗の大物だけでも次のようなものがある。薄熙来・中共中央政治局委

i 立命館大学産業社会学部教授

員・重慶市党委員会書記長、劉志軍・鉄道省党委員会書記長・長官、李春城・四川省党委員会副書記長、劉鉄男・国家發展委員会副主任、呉文勝・湖北省党委員会常務委員・司法委書記長、周鎮宏・広東省党委員会常務委員・統戦部長、……などの高官たちが罷免され、立件されている⁴⁾。しかし、これは決して官僚汚職のすべてではない。汚職・腐敗の氷山の一角に過ぎないと見たほうがいいであろう。摘発されたものはたまたま運が悪くばれているだけなのである。このように中国社会の腐敗・汚職の事件は高官から行政の末端まで底なしの状態となっていることが分かる。

このような社会の歪み現象に対して庶民達は強い不満や憤りを抱いている。この不満や怒りを何らかの形で表明したいのである。そこで登場してきたのがこの当世ざれ歌の「順口溜」である。公に政治や政府に対する批判は依然として厳しい統制が敷かれている中国では、あえて身の危険を冒すまでストレートな強烈な批判を展開する人がやはり少数派であろう。多くの人々は危険性の伴わない表現手法を選んでいる。その好都合の表現形式は当世ざれ歌の「順口溜」である。「順口溜」は口から口へと伝播され、政府や役人への強烈な批判・皮肉をしながらも、創作者が誰か、はっきり分からないのである。一方、批判される側は、この「順口溜」を排除しようと思っても、排除することが不可能である。したがって、1980年以降に「順口溜」は激変した社会と比例しているように大量に創作されているのである。人々は日頃の不満や怒りを「順口溜」を通じて発散させている。いわば「順口溜」は政府や役人に対する庶民たちの不満や怒りを代弁しているのである。「順口溜」はこのような性格を持っている。この性格は「順口溜」の大流行を促進させている。

他方、「順口溜」の空前の大流行は、急激な社会変化のほかに、もう1つ重要な要因がある。これは「順口溜」自身がユーモア的な性格を具えているからである。「順口溜」は多くの滑稽的な表現を使い、独特のユーモア的な雰囲気醸成させ、聞く側にも

伝える側にも面白く感じさせ、ストレスの解消にもなれるのである。この滑稽な性格があつてこそ「順口溜」は人々に喜ばれているのである。

1-2 先行研究の現状及び本論のねらい

「順口溜」の研究はこれまでには以外にもあまり為されていないのが現状である。これは日本ばかりでなく、中国においても、欧米においても同じ状況である。岡益巳の研究によれば、「英文による文献検索（データベース：World Cat＝米国国会図書館目録）も行ったが、1995年5月現在、鄧小平政権下の流行り謡を取り上げた文献は一点も存在しない」と指摘されている⁵⁾。この指摘で示しているように「順口溜」に関する研究がいかに少ないかが分かる。近年になっても研究論文が散見されるが、研究の専門書が依然として少ないのが研究の現状である。なぜこのような研究状況になっているのか、その理由としてはおよそ次のようなことが考えられる。

まず第1に、「順口溜」と呼ばれる当世ざれ歌は支配者の側から見れば奨励して研究させる価値のあるものではないとされているからである。「順口溜」は政府の官僚や役人を風刺したり、世相を皮肉ったりして、いわば支配階級に対する反抗的な意味合いを持つものが圧倒的に多く、支配者にとっては都合のいいものではないのである。古代から一貫して天子を中心とした官僚役人支配の中国の社会においては、支配者への悪口が許されない風潮がある。このような社会的な風潮が改善されないかぎり、支配者を風刺・批判する「順口溜」のような研究が奨励されないのが当然の成り行きであろう。つまり「順口溜」のような当世ざれ歌に関する研究の環境が整えられていなかったのである。1980年代以降は言論の自由がかなり改善されてはいるが、反政府の政治的な言論などは依然として厳しい監視が敷かれているのが実情である。

第2に、研究者自身の問題である。研究者の間には有名な作品や正史書籍などに書かれたものだけを重視する風潮があり、庶民達の創作したものが

「不登大雅之堂」（上品な場所に出せないもの）と見なされ、あまり取り扱わないのである。岡益巳の著書《現代中国と流行り謡》では下記のように指摘されている。

「流行り謡に関する研究は以外に少ない。その理由として概ね次のようなことが考えられる。中国文学者にとって、『ざれ歌』に過ぎない流行り謡は文学的な価値の低いものでしかなく、興味の対象外であろう。民俗学者の場合は、例えば、少数民族の風俗習慣或いは特定の地域に伝わる伝統的な冠婚葬祭の風俗といったような面に目が向きがちである。社会学、心理学の分野であれば、さらに実証性の高い調査研究が可能であり、流行り謡には目が向かないのは当然である。そのため、現代化路線の下における流行り謡を本格的に取り上げた研究は、筆者の知る限りでは、台湾の中国大陆問題研究所スタッフである甘棠氏の著作以外は見あたらない。」⁶⁾

岡益巳の指摘が示しているように「順口溜」に関する研究は厳しい社会的な背景の中に置かれているので、あまり多くの研究成果をあげておらず、全体としては貧弱な状況が続いていると言わざるを得ないのである。多くの研究は、資料を収集し、それを分類してまとめる、いわば資料集的な性格のものに留まるものが多く、「順口溜」の構造や表現手法、あるいは「順口溜」が風刺・批判している社会現象への深い洞察やその原因の究明などがあまり行われていないのである。

幸いに岡益巳は優れた研究を行い、1995年に《現代中国と流行り謡》という力作を出版して、この領域における研究を大きく前進させていたのである。岡益巳の著書では日本人研究者の藤沢由蔵、柿崎進、串田久治三氏の研究や資料収集について紹介している⁷⁾。藤沢由蔵は1930年代後半から1940年ごろまでの山東省で流行した謡を百数十篇収集し、謡の背景解説も詳しく行っている。柿崎進は1974年の著書《中国の民歌》に1924年ごろから1950年ごろまでの農民の謡を294篇採録して分類し、日本語訳を併記して適宜の解説も加えている。串田久治は1990年に

《天安門落書》を出版し、厳密な意味での先行研究ではないが、民主化運動が高揚した当時の標語などを採取していた。また、岡益巳は中国人の先行研究として趙金銘、甘棠、樹建、左愚氏の研究を紹介している⁸⁾。それによれば、1989年に趙金銘は大阪外国語大学論集に論文を発表し、1980年代後半に流行した流行り謡90篇を採録し、その背景などを分析している。甘棠は台湾の中国大陆の研究者であるが、収集して雑誌に連載した「順口溜」393篇を2冊の本にまとめて1988年、1989年に《中国大陆の順口溜》と題して出版した。甘棠の本では、収集した「順口溜」を党政、軍事、経済、文化教育、農工業、社会、総合の7つの項目に分類し、その背景などの解説を加えていた。ただ、収集した「順口溜」は党政の部分は全体の50%近くも占めていた。樹建、左愚は「順口溜」を300余篇採録し、1994年に《当代順口溜与社会热点扫描》（ざれ歌と社会のホット話題）と題して出版し、その背景なども解説した。

また、「順口溜」ばかりを論じているとは限らないが、「順口溜」と係わりを持たせた研究も多く行われている。大いに参考になる出版物も次のようなものがある。例えば、周一民著《北京俏皮話辞典》（北京燕山出版社、1992年）、陳原著／松岡栄志編訳《中国のことばと社会》（大修館書店、1992年）、謝貴安著《中国諺文化－諺語与古代社会》（華中理工大学出版社、1994年）、常敬宇著《漢語詞彙与文化》（北京大学出版社、1995年）、余雲華著《口頭禪》（河北人民出版社、1997年）、張守常著《中国近世諺語》（北京出版、1998年）、何群著《民謡語》（新華出版社、1998年）といったような書物は「順口溜」の研究にとっても大変参考になるものである。

さらに90年代以降のインターネットの普及で、「順口溜」の創作、伝承、収集整理は空前の活気を見せている。インターネットでは、笑い話、ユーモア、風刺などの項目を設けたり、「順口溜」の専用ホームページを開設したりしている。中国政府の代弁者でもある《人民日報》のネットでさえも「風刺和幽默」（風刺とユーモア）の項目が設けられるように

変化している。このようにインターネットの発達は「順口溜」の収集作業をかなりしやすくさせているのである。また、「順口溜」と係わりを持つ「民歌」に関する研究も数多くの力作があり、「民歌」集も多く出版されている。「民歌」は本論で言う「順口溜」の範疇には入らないが、「順口溜」の研究には大いに参考になる。

このように「順口溜」に関連する資料集或いは関わりを持った研究書などが多く出版されているのが大いに評価すべきことである。しかし、上に述べたようにこれらの研究はあくまで資料集的なもの、或いはすこし関連を持たせたぐらいで終わってしまうものがほとんどで、「順口溜」だけを絞って深く掘り下げて研究するものはきわめて少ないのである。とくに「順口溜」の表現手法、あるいは「順口溜」に風刺批判されている社会の歪みの現象に対する深い洞察やその原因究明を行った研究が僅少である。

本論はこのような現状を踏まえながら、「順口溜」について、「順口溜」の定義、それが指している範囲、他の近似していることばとの違い、古代、近現代「順口溜」の作品、古代から一貫した「順口溜」の特徴などを明らかにしていくことを試みる。

2. 「順口溜」の定義

2-1 「順口溜」の定義

本論で取り上げられる「順口溜」(shun kou liu)は中国語原文の呼び方である。「順口」は口から出任せの意味を表し、「溜」は滑るという意味を表す。「順口溜」は、この2つの意味を組み合わせで作りに上げたことばであろうと筆者は考えている。本論では「順口溜」は次のように定義しておきたい。「順口溜」とは、「口から出任せに言える、語呂のよい滑稽な口語体韻文である。大衆が創作し、大衆の間で流行り、社会の歪みの現象を風刺・批判する当世ざれ歌である」と定義する。ここに特に強調しておきたいのは滑稽味のあること及び歪みの社会現象を風刺・批判することである。

「順口溜」は英語では「doggerel」(滑稽な詩)と訳されている。この英訳で示されているように「順口溜」は滑稽味のある歌や詩と解釈されているのである。一般的に分類上では「順口溜」は民間文学のジャンルに分類され、詩の前身や詩の母体に当たるものであると解釈されている。いわば「順口溜」は大衆の詩の1種であると捉えられている。しかし、他方、「順口溜」が「熟語」の1種であると主張する学者もいる。崔希亮はこの説を主張する代表的な研究者といえる。崔希亮の《漢語熟語与中国人文世界》(中国語の熟語と中国の文化)の本の中で、中国語の熟語は成語、慣用語、俗語、ことわざ、格言、対聯、しゃれことば、流行語、流行歌謡などが含まれると主張し、「順口溜」は熟語の1種であると分類しているのである⁹⁾。

「順口溜」は「歌謡」或いは「流行歌謡」「民間歌謡」とも呼ばれ、多くの場合はこれらのことばと同じ意味に使われている。しかし、これらのことばは意味がまったく同じで、区別がないことでもない。「順口溜」が口語的な用語であるのに対し、「歌謡」はやや文学的な用語となるのである。また「歌謡」は、社会や支配者を風刺するものもあれば、男女の愛を語るものもある。これに対して、「順口溜」はもっぱら滑稽味、風刺味の強いものを指す場合が多いのであり、称えるものや男女の愛を語るといったようなものはあまり含まれないのである。

「順口溜」という用語は比較的新しいことばであると考えられる。中国語の代表的な辞書《辞海》は1936年に初版され、現在も版を重ねているが、「順口溜」ということばは初版から収録されていないのである。筆者の調べたところ、最初に「順口溜」を収録している辞書は《現代漢語詞典》(中国社会科学院語言研究所編、商務印書館、1965年試用版)と《岩波中国語辞典》(石倉武四郎編、岩波書店、1963版、1977年第13刷)であると考えられる。それ以前の辞書には収録されていないことが判明されている。このことが示しているように、「順口溜」は比較的新しいことばであると推測できるのであろう。

ところが、この「順口溜」は日本語に置き換える時には難しくてなかなかぴたりとした日本語訳が見つからないのである。代表的な中国語の辞書の説明も適切な訳語を与えておらず、意味解釈の形に留まっているのである。例えば、《中日大辞典》では、「民間芸術の一種：話し言葉による韻文で、長短まちまち。大変口調がよいのが特徴」¹⁰⁾と説明している。《中日辞典》では、「民間で流行っている話し言葉による韻文の一種。文句の長さは一様ではないが、非常に語呂がよいのが特徴」¹¹⁾と語釈している。このように辞書では、民間に流行っていること、句の字数はこだわらないこと、話し言葉を使用すること、句末に韻を踏んでいること、語呂がよいことというふうにその特徴を解釈していることに留まり、適切な日本語の訳語が与えられていないのである。また、辞書の説明ではあくまで「順口溜」の構造的な特徴を挙げていることに過ぎず、「順口溜」に訴えている内容については何も触れていないのである。このように中国語の「順口溜」ということばの日本語訳はいかに難しいかが分かる。本論ではこの「順口溜」を当世ざれ歌と訳することにする。一方、岡益巳の《現代中国と流行り謡》の著書では、「順口溜」は「流行り謡」と訳されている。

2-2 他の用語との違い

「順口溜」の外に、「歌」、「謡」、「民歌」、「民謡」、「歌謡」、「謡諺」などのようなことばがある。ここではこれらのことばの意味や区別などを整理しておきたい。

「歌 (ge)」は曲を付けて歌える字句、「謡 (yao)」は出任せに歌い出す、伴奏のない韻文である。古代では「歌」と「謡」は区別されていたのである。中国の最古の詩集《詩経》の『風・魏風・園有桃』には「心之憂矣，我歌且謡」（心が憂うため、歌及び謡を歌う）という語句がある。《毛伝》注には「曲合衆曰歌，徒歌曰謡」（曲を付ければ歌と言い、曲なしの素歌は謡と言う）という語句がある。《韓詩章句》には「有曲章曰歌，無曲章曰謡」（曲付けのものは歌、

曲なしのものは謡と言う）という記載がある¹²⁾。これらの解釈が示しているように「歌」と「謡」は古代では区別され、曲を付けて歌うものは「歌」と言い、曲を付けていない素歌は「謡」と言うのである。言い換えれば、「歌」は歌うものであり、「謡」は歌わないものである。「歌」と「謡」の区別は曲の有無によって区分されているのである。しかし、これはあくまで音楽の視点から分類していることで、「歌」と「謡」の構造及びその内容などについてはあまり考慮していないのである。構造の側面から考えれば、「歌」は決まった形式で造られたものが多いのに対し、「謡」はあまり形式に拘らないものが多いのである。内容の面においては、「歌」は男女の愛や生活など様々なテーマが歌われるが、「謡」は政治や支配者に対する風刺、皮肉、反抗などのものが多いのである。しかし、他方、「歌」は曲を無くして歌詞だけにすれば、「謡」として見なすことも可能であり、また、「謡」も曲を付けていけば、「歌」として見なすことも可能である。特に古代の「歌」は時代の変化につれて演奏されなくなり、曲も失ってしまい、残っているのは歌詞だけになってしまった場合が多いのである。したがって、「歌」と「謡」の区別が難しくなり、「歌」と「謡」の両方を指すことばが必要となる。この実態から生まれたのだろうか、「歌」と「謡」の両方を指すことのできる「歌謡」ということばが生まれた。文字通り、「歌謡」は「歌」も「謡」も指すのである。

「歌」には「民歌 (min ge)」というものがある。文字通り「民歌」は民間で創作し、民間で歌い継がれる「歌」のことを意味するのである。「民歌」は比較的に新しいことばと言われ、英語の「folk song」から翻訳された用語であると見られ、西欧文明が取り入れられる20世紀初期ごろの民俗関係の文献に散見し始めていたとされている。「民歌」は人々が口頭で創作した歌曲で、ローカル色に富んでいる物が多いのである。「民歌」はさらに「情歌」、「労働歌」、「生活歌」、「時政歌」、「儀式歌」、「児歌」、「山歌」、「田歌」、「漁歌」のように再分類することもできる。

また、ある特定の地域の「民歌」はその地域の「民歌」を表す専用のことばを用いる場合がある。例えば、古代呉国地域の「民歌」は「呉歌」と呼ばれ、古代越国地域の「民歌」は「越歌」と呼ばれる。陝西省の北部に流布している「民歌」は「陝北民歌」と呼ぶ。「陝北民歌」は人によっては「信天游」と呼ぶ場合もある。また、中国西北地域全体に流布している民歌は「西北民歌」と呼ぶ。その中に「花兒」と呼ばれるものがある。

「花兒」は、甘肅省・青海省・寧夏自治区・新疆自治区の周辺に広く流布している有名な「民歌」の一派である。「花兒」は今日でも西北地域の民間で盛んに歌い継がれている。有名な地域としては甘肅省の「河州」地域や「蓮花山」地域を挙げることができる。この地域の「花兒」は古くから歌い継がれ、その起源は少なくとも唐の時代に遡ることができるとされる。学者によっては周の時代に遡れると主張している。「花兒」は曲を付けているので、「民歌」になるのであるが、「花兒」の曲を取り除き、歌詞だけにすれば、「花兒」も「謡」すなわち曲なしの素歌となる。したがって、曲なしの「花兒」の歌詞も「順口溜」として見なす場合がある。

「謡」には「民謡 (min yao)」というものがある。文字通り「民謡」は民間で口承されている、曲を付けない素歌のことを意味するのである。日本語にも民謡ということばがあるが、中国語の「民謡」と日本語の民謡とは、その意味が大きく違い、中国語の「民謡」は曲や伴奏を伴わない素歌のことを指すのであり、日本語の民謡は曲を伴うので、中国語の「民歌」に当たるのである。一般的に中国語の「民謡」は時事や政治に関係するものが多く、強い風刺の意味合いを持ち、客観的な描写を行う性格があるとされている。他方、「民歌」の場合は主観的な感情を表現し、ローカル色に富んでいる物が多いのである。また、「民謡」は「民歌」よりその字数や構造などが比較的自由となる。

しかし、「民謡」と「民歌」の区別があくまで相対的なもので、厳密的な区別は難しいところがある。

「民謡」は曲を付けていけば、「民歌」になることも可能であり、また、「民歌」も曲を取り除き、歌詞だけにすれば、「民謡」として見なすことが可能である。したがって、曲を取り除いた「民歌」の歌詞や、素歌の「民謡」を取り扱う時には、両方の意味を反映できることば「歌謡 (ge yao)」を使うことになる。文字通り「歌謡」は「民歌」も「民謡」も含まれるのである。「歌謡」は「民間歌謡」、「流行歌謡」、「順口溜」とも呼ばれる。

他方、呉超の説明によれば¹³⁾、厳格のおよび科学的に言えば、「民歌」はすなわち「民間歌曲」のことで、詞があり、曲があり、歌うことができ、和することができ、比較的安定した曲の構造をもっている。歌詞も楽曲と対応できる格式を持っていて、詞、曲、演技を一体に融合した総合的な芸術である。「民謡」は歌わないのが普通で、ほとんど固定した曲調がないが、詠むことができ、吟ずることができ、朗唱することができる。章と句の格式は比較的自由で、民歌のように厳格的ではないが、強いリズムを持っている。ゆえに「徒歌」とも呼ばれていると主張している。

「民歌」や「民謡」の外に「諺語」(ことわざ)ということばがある。「諺語」は哲学的、科学的、教訓的な道理を表すものが多いのが特徴で、句の構造も固定的であり、短いものが多いのである。この点では「歌謡」などとはかなり違っているのである。ただ、「諺語」は風刺の意を寓するものもあり、「民謡」化に改編されたりする場合もある。また、資料集などに整理する時にも、「諺語」は「歌謡」と一緒に同一の本に収録されたりする場合がある。したがって、「諺語」や「歌謡」を一緒に取り扱う場合には、両方を表現できることばが必要となる。それで「謡諺」ということばが生まれたのである。文字通り、「謡諺」は「歌謡」も「諺語」も含まれることになるのである。

2-3 「順口溜」の起源と種類

前に述べているように、中国語では「順口溜」を

必ずしも統一した名称で呼んでいるわけではない。「順口溜」の用語以外に「歌謡」「民謡」「謡諺」「流行歌謡」「民間歌謡」などの名称も使われている。したがって、「順口溜」を論じる時には、どうしても「民謡」「歌謡」「謡諺」「民歌」などに関わってくるのである。

《中国歌謡》という本がある。これは、朱自清が1929-1931年に北京の清華大学で教鞭を取った時の大学講義の原稿である。この講義原稿は作家出版社が整理し1957年に《中国歌謡》と題して出版したのである。2005年に復旦大学出版社が講義原稿を再度校訂して再出版している。中国の「順口溜」を研究する近代の専門書として見逃すことのできない大きな存在となっている。書物は「歌謡の定義」「歌謡の起源と発展」「歌謡の歴史」「歌謡の分類」「歌謡の構造」「歌謡の修辞」などの項目を立てて論考している。

「歌謡」の起源についてこう論じている。「歌謡は最古の詩である。詩の起源の考察は、すなわち歌謡の起源の考察となるのである。」「詩は志の致すものである。心にある時には志と為し、ことばにすれば、詩と為すのである。」「古代中国では歌舞が盛んに行われていた。歌舞の興隆は古代の巫女の行事によるものであろう。」「舞を行う時には、歌を伴わなければならない。歌には必ず歌詞がある。」などと述べられている¹⁴⁾。これらの論述が示しているように、中国の「歌謡」の起源はきわめて古く、古代の巫女の祈祷行事に遡ることができるとされている。

「歌謡」の起源と関連して「歌謡」の生成過程については、詩の「歌謡」化、仏教経典の「歌謡」化、児童啓蒙書の「歌謡」化、詞曲の「歌謡」化、史実の「歌謡」化、伝説の「歌謡」化、劇の「歌謡」化などによる生成過程があると指摘している¹⁵⁾。

児童啓蒙書の「歌謡」化を論じている《中国歌謡》の用例を下記のように引用して記しておく。

例1. 人之初，鼻涕拖。

拖得長，吃得多。¹⁶⁾

（人間は子供の時には、鼻汁が垂れる。長く垂れて、口にも入ってくる。）

例1は有名な児童の漢字啓蒙書《三字経》の最初の語句を改編して「歌謡」化したのである。もともとの語句は、「人之初，性本善。性相近，習相遠。」（人間が生まれた当初には人間の本性はもともと善である。もともとの本性は似かよっている。しかし、環境や教育によって習性はかなり違ってくる。）となっているが、この超有名な語句は例1のように別の内容に改編され、「歌謡」化にされたのである。

「歌謡」の歴史については、朱自清は《詩経》の「歌謡」、《楽府》古辞系の「歌謡」、《楽府》の曲系の「歌謡」、民間の山歌、小唄、素歌などを取り上げて論じている。

創作手法については、追憶的に作られたもの、古人の詩文に託して作られたもの、目的に合わせて創作されたもの、改編して作られたもの、模倣して作られたものに分けられると論じている。

「歌謡」の構造については、語句の重複式を中心に考察している。「歌謡」の修辞については比喩の表現手法を中心に論じている。

朱自清の《中国歌謡》では、「歌謡」の分類基準やそれぞれの違いなどについて下記のように論じている。「歌謡」は様々な基準や視点で分類され、その基準や視点が15種類にも及ぶ。すなわち①音楽の視点、②性格の視点、③構造形式の視点、④風格の視点、⑤書き方の視点、⑥モチーフの視点、⑦ことばの視点、⑧脚韻の視点、⑨歌い手の視点、⑩地域の視点、⑪時代の視点、⑫職業の視点、⑬民族の視点、⑭歌い手の人数の視点、⑮効用の視点、と指摘している。また、朱は欧米の学者を含む著名な学者たちの分類法や特徴なども紹介している。それによると、数多くの分類法の中で、朱が評価したのは周作人の六分類法である。すなわち①「情歌」、②「生活歌」、③「滑稽歌」、④「叙事歌」、⑤「儀式歌」、⑥「児歌」のような分類法である。

一方、鐘敬文は、周作人の分類法を参考にして、

①「労働歌」、②「儀式歌」、③「時政歌」、④「生活歌」、⑤「情歌」、⑥「児歌」のように分類している¹⁷⁾。段宝林は、民歌の体裁から、①「山歌」、②「爬山歌」、③「信天遊」、④「花兒」のように分類している¹⁸⁾。

本論で言う「順口溜」は主として周作人の「滑稽歌」、鍾敬文の「時政歌」あたりに当たるものである。

3. 古代の「順口溜」

3-1 最古の詩集《詩経》

「順口溜」の源流を遡っていけば、2500年前に成立した中国の最初の詩集である《詩経》にその原型を求めることができる。《詩経》¹⁹⁾は「国風」「雅」「頌」の3部から構成されているが、その中の「国風」と「小雅」の篇にはすでに周時代の民間の「歌謡」が収録されており、「順口溜」の原型として見ることができる。例えば、《詩経・魏風》の中の「伐檀」という謡があるが、その一部分を見てみよう。

例2. 坎坎伐檀兮，置之河之干兮，河水清且涟漪。

不稼不穡，胡取禾三百廛兮？

不狩不猎，胡瞻尔庭有县獐兮？

彼君子兮，不素餐兮！

坎坎伐辐兮，置之河之侧兮，河水清且涟漪。

不稼不穡，胡取禾三百亿兮？

不狩不猎，胡瞻尔庭有县特兮？

彼君子兮，不素食兮！

「伐檀」《诗经・国风・魏风》²⁰⁾

（檀を切るよ。川辺に運ぶよ。川の水が奇麗よ。田んぼを耕さない人間はなぜ穀物を3百山所有するのよ。獐をしない人間はなぜ庭に熊肉をぶら下げているのよ。かれらはただでもらっているのよ。車輪の輻を切るよ。川辺に運ぶよ。川の水が奇麗よ。田んぼを耕さない人間はなぜ穀物を3百間所有するのよ。獐をしない人間はなぜ庭に野獣の肉をぶら下げているのよ。かれらはただでもらっているのよ。）

例2は紀元前700年以前の魏という国の「歌謡」とされている。労働もせずに収穫物を占有する支配貴族達に対する檀切りの農民たちの不満を表したざれ歌である。現在の「順口溜」の原型とも言える。

《詩経》は中国の最古の詩集であるが、その中の「国風」に収録されているものは一般的に謡として扱う。その数は160篇に上り、《詩経》収録総数305篇の内の半分に達しているのである。「国風」は周南、召南、邶、鄘、衛、王、鄭、齊、魏、唐、秦、陳、檜、曹、豳の15の国と地域の小唄や謡などを収めている。しかし、その160篇はすべて謡であるかどうか、また「国風」以外の「雅」「頌」に収録されているものは謡がないのか、もうすこし丁寧に吟味・考察する必要があるだろうと研究者達は指摘している。

3-2 漢時代の《楽府》

漢の時代には漢の武帝が民間の歌を広く集めるために、宮廷に音楽を司る役所を設置した。その名は「楽府」と名づけた。「楽府」は各地の民謡などを集め、それを宮廷の祭礼や宴会などの演奏曲として宮廷に提供していた。「楽府」は歌の収集だけに止まらず、文人による創作も行わせていた。後世、「楽府」で作られた或いは収集された楽章も歌辞も、「楽府」と呼ばれるようになったのである。研究者達は一般的に漢の古曲や六朝時代の「民間歌謡」に基づいて作られた楽府を楽府古辞といい、中唐以降に作られた楽府を新楽府という。また、唐代以降は、古楽府はほとんど演奏されなくなり、古楽府の形式に沿って作られた歌は朗読されるだけになってしまったのである。日本の研究者達は宮廷音楽を司る役所を指す場合は「がくふ」と呼び、歌詞を指す場合は「がふ」と読んで区別している。

北宋の郭茂倩は漢から唐に至るまでの「民間歌謡」及び文人達はその古題に基づいて創作したり、その体裁を模倣して作ったりした新楽府を集めて編集し、《楽府詩集》を名づけた。《楽府詩集》は「郊廟歌辞」「燕射歌辞」「鼓吹曲辞」「横吹曲辞」「相和

歌辞」「清商曲辞」「舞曲歌辞」「琴曲歌辞」「雜曲歌辞」「近代曲辞」「雜歌謠辞」「新樂府辞」のように12種類に分類され、100巻も作られている。

《樂府詩集》に収録された歌は「順口溜」として見なされるものが多数存在していると考えられる。樂府の有名作の1つである「孤兒行」は「順口溜」の原形として見ることができるであろう。

例3. 孤兒生，孤子遇生，命独当苦。

父母在时，乘坚车，驾驷马。
 父母已去，兄嫂令我行贾。
 南到九江，东到齐与鲁。
 腊月来归，不敢自言苦。
 头多虬虱，面目多尘土。
 大兄言办饭，大嫂言视马。
 上高堂，行取殿下堂。
 孤兒泪下如雨。
 使我朝行汲，暮得水来归。
 手为错，足下无菲。
 怆怆履霜，中多蒺藜。
 拔断蒺藜肠肉中，怆欲悲。
 泪下漉漉，清涕累累。
 冬无复襦，夏无单衣。
 居生不乐，不如早去，下从地下黄泉。
 春气动，草萌芽。
 三月蚕桑，六月收瓜。
 将是瓜车，来到还家。
 瓜车反覆。助我者少，啖瓜者多。
 愿还我蒂，兄与嫂严。
 独且急归，当兴校计。
 乱曰：里中一何譏讟，
 愿欲寄尺书，将与地下父母，兄嫂难与久居。

《樂府詩集・相和歌辭十三》卷三十八²¹⁾

（孤兒の命は本当に苦しい。父母がいた時には4頭立ての丈夫な馬車を使っていたが、父母が亡くなった後は、兄と兄嫁に行商をさせられた。苦しい行商では、南は九江に到り、東は齊や魯に到るのだ。しわすに帰ってくるが、苦しみを自らからは言えない

のだ。頭にはしらみが多く、顔には汚れだらけだ。兄は飯を作れと命じ、兄嫁は馬の世話をせよと言うのだ。高い堂に登り、殿下の堂にも行き向かう。孤兒の涙は雨の如く流れる。朝には水汲みに行かせられ、暮れには水を担いで帰る。手にはひび割れができ、足の下には草履もないのだ。そうそうと霜を踏み、刺の多い道を歩く。棘が脛の肉の中に刺しこみ、その痛みはたまらないのだ。涙はボロボロと、鼻汁はボトボトと落ちるのだ。冬には上着がなく、夏には単衣もないのだ。この世は楽しいことがなく、早くあの世に行った方がましだ。早く地下の黄泉に行こうと思う毎日だ。春の季節がやってくる。草は芽をもやす。3月には蚕や桑の仕事をし、6月には瓜収穫の作業を行う。瓜車を推して家に帰り、また推して畑に戻る。助けてくれる者はいない。ただで瓜を食う者は多いのだ。せめて瓜のヘタだけを返してくれ。兄と兄嫁は厳しいからだ。もし急いで帰れば、揉めごとになるに違いない。歌に曰く、村の中は騒がしく、願わくは尺の書を寄せて、地下の父母に与えたいのだ。兄と兄嫁とは長く共に生活するのが難しいのだ。）

「孤兒行」は、父母を失った少年が兄夫婦の下で生活し、兄夫婦に虐待酷使されるその苦しみを訴える歌である。財産や権力が家長に集中する封建中国社会では、兄弟であっても弟は家長の権勢の下に不本意な生活を送らなければならない事が多いのである。歌は兄夫婦の虐待に対する訴えであるが、その本質は封建社会及びその支配階級に対する批判や反抗であり、風刺でもある。従って、「孤兒行」は本論で言う「順口溜」の原型として見なしてもよいであろう。

3-3 明時代の《古今風謠》

明の時代には楊慎という学者がいた²²⁾。彼は多芸多才の文人で、漢詩も大好きで、《昇庵詩話》を始め、百余種の書物を書きあげた。その中の1つは《古今風謠》である。《古今風謠》は1543年に編纂さ

れたとされ、古代からの「歌謡」や童謡など280余点のざれ歌を収録している。収録されたざれ歌は主として古い典籍や文献書類から集められ、典籍年代順に並べられている。清の時代に下ると、この書物は史夢蘭の収集によってさらに増補され、増補されたざれ歌は4巻から構成され、《古今風謡遺漏》と名づけられている。《古今風謡》には本論で言う「順口溜」の作品は多く収録されている。《古今風謡》の用例を見てみよう。

例4. 生男慎勿举，生女哺用脯。

不见长城下，尸骸相支柱。

《古今風謡》1881年「函海」刊本²³⁾

（男が生まれたら、育てないでよ。女が生まれたら、大事に育ててくれよ。長城の下を見てみなさい。屍骸があちこちに満ちているのだ。）

例4は秦の始皇帝の残酷な支配に対する反抗の感情を表した「順口溜」である。始皇帝は万里の長城を築くために、幾千幾万の労働力を動員し、酷使に働かせた。この過酷な労働条件の下で、死んでいた労役は数え切れない。夫が長城の労役の出発に当たり、妻に遺言のように悲しいことばを残した場面の描写である。労役の苦しさ及び支配者の残酷さへの批判を表現している。

例5. 举秀才，不知书。

举孝廉，父别居。

举良将，怯如鸡。

《古今風謡》1881年「函海」刊本²⁴⁾

（秀才と称されるものが、書物はまったく知らないのだ。親孝行の模範と称されるものが、親と別居しているのだ。猛将と称されるものが、胆は鶏のように小さいのだ。）

例5は後漢時代の恒霊帝朝の「順口溜」であるが、世の中の歪みの現象を皮肉っているのである。模範人物として推挙されたものはまったく模範的でない

ことへの強い批判の気持ちを表しているのである。

3-4 清時代の《古謡諺》

《古謡諺》は清末に編纂された歴代のざれ歌や諺の集である。著者は清末の杜文瀾である。杜は1815年浙江省に生まれ、1881年に亡くなったと伝えられている。生涯の最高官位は江蘇省の「道員」であった。杜が編著した書物は《古謡諺》の外に、《宋香詞》、《曼陀羅華閣記》などがある。杜はぼう大な典籍から、春秋戦国時代から明時代までの歌謡や諺などを収集し、100巻からなる謡や諺の集に整理編纂し、《古謡諺》と名づけた。この《古謡諺》に収録されたざれ歌や諺は3300余点に上り、調査・引用した典籍は860冊にも達していたと言われている。収録されたざれ歌や諺は出典書物の「経」、「史」、「子」、「集」の順に編集されている。この《古謡諺》は古代の「順口溜」の集大成と言えよう。1958年中華書局出版社は《古謡諺》を校正して再版した。《古謡諺》の用例を見てみよう。

例6. 以贫求富，农不如工，工不如商。

刺绣文，不如倚市门。

《古謡諺》第5巻²⁵⁾

（貧しきから富を求めるなら、農は工に及ばず、工は商に及ばない。刺繍をするものは市に頼るものに及ばない。）

例6は司馬遷著の《史記・漢書貨殖傳序》に出てくるものであるが、前漢時代の社会の歪みの現象を皮肉っているのである。「富を求めるなら、農業をやるよりも工業をやった方が利益はあるのだ。工業をやるよりも商業をやった方が儲かるのだ。女性は刺繍をやるよりも市の飲み屋で男性客をもてなす方が儲かるのだ」という拝金主義の社会を批判しているのである。

例7. 酒秃酒秃，何荣何辱。

但见衣冠成古邱，不见江河变陵谷。

《古谣谚》第24卷²⁶⁾

（酔っ払いは栄光も侮辱もない。人が死んでいくのを見たことがあるが、川が山になるのを見たことがない。）

例7は《馬氏南唐書浮屠元寂傳》に出てくるものであるが、戦乱で多くの死者が目の前に現れて、未来に対する希望がなくなり、酒飲みの明け暮れを送るしかない五代十国時代の戦乱社会に対する批判の気持ちを表しているのである。

4. 近現代の「順口溜」

4-1 中華民国時代の週刊誌《歌謡》

中華民国の時代では北京大学教授の周作人らの著名人達が「民間歌謡」収集のためにグループを結成し、収集計画を作成して、1918年2月に《北京大学征集歌謡簡章》（北京大学による「民間歌謡」の収集について）という計画書を新聞で発表した。計画発表後2ヶ月も立たない内に全国から1100余点の「民間歌謡」の投稿が寄せられていた。収集グループはその内の148点を新聞に発表した。1920年周作人らは「北京大学歌謡研究会」を作り、1922年には《歌謡》という雑誌の創刊にたどり着いた。「創刊号のことば」に周作人は「歌謡は国民の声であり、歌謡の収集整理は将来における民族詩の発展につながるものである」と述べて収集の意味を強調した。しかし、残念ながら《歌謡》は1925年6月に97号をもって休刊し、後に《国学門週刊》に吸収されてしまったのである。1936年4月に《歌謡》は復刊されるようになったが、1937年6月に通算150号をもって廃刊されてしまったのである。《歌謡》に収集されたざれ歌などは3万余点にも上っていた。《歌謡》の用例を見てみよう。

例8. 一张帕子两边花，背时媒人二面夸。
一说婆家有田地，二说娘家是大家，
又说男子多聪明，又说女子貌如花，

一张嘴巴叽哩呱，好似田中青蛤蟆。
无事就在讲空话，叫儿叫女烂牙巴，
日后死在阴司地，鬼卒拿你去捱叉！

《歌謡》第1号²⁷⁾

（ハンカチの両面にも花模様があるように、嘘つきの仲人は男と女に嘘ばかりのことを言うのだ。女には男の家は土地があると偽り、男には女の家は金持ちだと嘘をつく。男が賢い子だと偽り、女が美貌の子だと嘘をつくの。いいことばかりやかましく言い続け、まるで蛙のように鳴くのを止めないのだ。人に会えば空言を言い出し、甘いことばで男と女を騙すのだ。あの世に行くことになった時には、鬼からの殴りを受けるに違いないのだ。）

例8は嘘つきの仲人を批判する「順口溜」である。自由恋愛ができない封建社会では仲人は男女の見合いや結婚にそれなりのいい役割を果たしていたのである。しかし、他方、嘘をついたりして男女を騙す例も少なくもないのである。例8は悪い仲人の場合を取り上げて批判しているのである。

例9. 裹脚呀，裹脚！裹脚难过活，
脚儿裹得小，做事不得了，
脚儿裹得尖，走路只喊天，
一走，一蹶，只把男人做靠身砖。

《歌謡》第5号²⁸⁾

（纏足よ、纏足！纏足は本当に辛いのだ。足が小さくされて、仕事時にはとても不便だ。尖るように纏足されて歩く時には痛いのだ。はやく歩くことができなく、男に頼らざるをえないのだ。）

例9は、足の成長を止めるために纏足させられる女性の苦しみを訴える「順口溜」である。封建社会における女性への差別を批判しているのである。

2例しか取り上げていないが、《歌謡》は世相を批判する多くの「順口溜」を収集していた。近代中国の「順口溜」の収集・整理にきわめて大きな役割を果たしたのである。北京大学の図書館に保存され

ている週刊誌《歌謡》は「順口溜」の研究者にとっては貴重な資料となる。しかし、他方、収集されていない全国各地に口承されていた「順口溜」は数え切れないほどある。

4-2 新中国成立後の《紅旗歌謡》

中国共産党が政権を取った1949年以降の中国は徐々に生産活動よりも政治運動が優先されるような政治路線に変化し始めた。そのため「順口溜」の創作も収集整理の作業も停滞していた。しかし、それでも1958年に古典の《古謡諺》を再校正して出版していた。また、時代を反映した《紅旗歌謡》も出版したのである。《紅旗歌謡》は郭沫若、周揚が主編し1959年に紅旗雑誌社によって出版されたのである。収録された300余篇の「歌謡」のほとんどが支配階級や政権側を称えるものばかりである。したがって、《紅旗歌謡》に収集された「歌謡」は本論で言う「順口溜」として認められないものとなる。本論で言う「順口溜」は支配階級の腐敗や社会の歪みの現象などを風刺・批判するものを指すのである。《紅旗歌謡》は支配階級批判の「歌謡」を収集しておらず、もっぱら政権側を称えるものばかりを収集していたので、本論で言う「順口溜」の範疇に入らないのである。《紅旗歌謡》に収録された「歌謡」を1例見てみよう。

例10. 天上没有玉皇，地下没有龙王，

我就是玉皇！我就是龙王！

喝令三山五岳开道，我来了。²⁹⁾

（天には玉皇の神が存在しないのだ。地下には竜王が存在しないのだ。われらが玉皇の神なのだ！われらが竜王なのだ！山よ川よ，道を開けてくれ。我々が来たよ。）

例10は1950年代に毛沢東を中心とする指導部が強引に推し進めた大躍進の決意や勢いを称える「歌謡」である。称える「歌謡」としては別に悪いことではないが、しかし、現実では大躍進運動が大失敗

したのである。したがって、大躍進を称えるよりもむしろ風刺・批判した「歌謡」の方が価値あり、面白いのである。

その時代には言論やメディアの自由がかなり厳しく制限され、政府などに対する批判が公にできないのである。例10が示しているように、政府役人の不正や社会の歪みの現象に対する風刺の意味合いがまったく感じられなく、称えるばかりである。

しかし、他方、言論が厳しく制限された時代であっても、支配階級に対する批判や風刺を込めた「順口溜」がまったくないわけでもない。狭い範囲や信頼できる友人同士の間に口コミで口承される政府批判の「順口溜」がある。例えば、次のような用例はまさにその時代に大衆の間に口承された、支配階級に対する風刺・批判の「順口溜」である。

例11. 广播喇叭吹上天，层层干部搞实验，

谷子吃了膨张粉，一亩能产七八千。³⁰⁾

（有線のラジオはホラを吹き続けている。各級の幹部は一斉に模範の田んぼを営む。穀物は膨張剤でも飲んだように、一畝は7千斤も8千斤も収穫するようになるのだ。）

例11は1950年代の大躍進時代に蔓延していた吹聴の報告の風潮を批判している「順口溜」である。1950年代では新政権の指導部が政治を優先させ、大躍進という運動を強引に推し進めていた。役人達は上級機関に対して競い合うようにその報告、吹聴の報告を行い、その風潮が蔓延していた。大躍進は失敗に終わった。その時代では、言論の自由が厳しく制限され、政府に対する公の批判が出来ないのである。しかし、このような時代であっても上記のような風刺・批判の「順口溜」が創作されていたのである。悪い社会風潮に対する批判や不満を表しているのである。

例12. 社员争工分，干部套工分，

狠人要工分，要赖的送工分。³¹⁾

（人民公社の社員は労働点数を稼ぐが、幹部は労働点数を上乗せにするのだ。傲慢な人は点数を強要するのだ。卑劣な奴は点数をただで記入するのだ。）

例12の「順口溜」は、毛沢東時代に強力に推し進められた人民公社制度の弊害を風刺・批判しているものである。人民公社は1970年代までの中国農村部の基礎行政の組織である。人民公社は平等に働き、平等に収穫した生産物を配分するという平等で理想的な共産主義社会を目指していたのであるが、しかし、人間はなかなか理屈通りに正直に働かないのである。怠けの働きが蔓延していたのである。例12の「順口溜」はまさにこのような歪みの現象に対する批判である。

例13. 黄浦江上有座桥，江桥腐朽已动摇。

江桥姚眼看要跨掉，请指示，是拆还是烧？³²⁾

（黄浦江には橋が掛けられている。江の橋は腐りかけて、揺れがひどくなっている。江、橋、姚は崩れそうになっている。解体それとも燃やす？指示を願いたい。）

例13は文化大革命時代の「四人組」を批判している「順口溜」である。江青、張春橋、姚文元、王洪文の4人組は文革中に毛沢東の威信を利用して政権の頂点に上り詰め、極左的な路線を推し進めていた。そのような時代であっても江青、張春橋、姚文元、王洪文の4人組を批判する「順口溜」が創作され、人々の間で口承されていたのである。「江橋姚」はすなわち江青、張春橋、姚文元を指しているのである。

4-4 1980年代以降の「順口溜」

1978年以降は、中国は30年近くも続いていた鎖国的な路線を転換して改革開放政策を実施し、前例のない発展を遂げ、社会が大きく変化した。この激変を反映するように「順口溜」も大量に創作され、収集整理の作業も盛んに行われた。「順口溜」と関係

する書物も多く出版されている。

とくに90年代以降ではインターネットの普及により、「順口溜」の創作・伝承・収集整理は空前の活気を見せている。インターネットでは、笑い話、ユーモア、風刺などの専門ホームページも開設されており、中国政府の代弁者である《人民網》のネットでも「風刺和幽默」（風刺とユーモア）の項目が設けられるぐらいに変化しているのである。1980年代以降の「順口溜」は本当に多い。数えきれないほど創作されている。3例ほど記しておく。

例14. 工农商学兵，到处吃喝风。

东西南北中，到处都吃公。³³⁾

（労働者・農民・商人・学生・兵士、どの階層にも飲み食いが盛んである。東・西・南・北・中、どの地域にも公金で飲み食いを行う。）

例14は現代中国に蔓延している公金による飲み食いの風潮を風刺しているのである。

例15. 送上美女主动办，送上钱财推着办，无钱无女靠边站。³⁴⁾

（美女を献上すれば、すすんで許可してくれるのだ。金を贈れば、催促したら許可してくれるのだ。金も美女もなければ、無視されるのだ。）

中国の役人たちは規定通りに速やかに市民のために各種の許可をするとは限らない。わざと延ばしたり、障害を設けたりする現象はよく見られる。大衆は許可を早く手に入れるために仕方なく賄賂を送ったりして催促し、許可を勝ち取るのである。例15は権力を握っているこのような役人達の腐敗を風刺・批判しているのである。

例16. 这集资，那摊派，都是上面表的态。

这竞赛，那达标，都是农民掏腰包。³⁵⁾

（この手の資金集め、あの手の割り当て、すべて上級機関の指示によるものだ。この種の競技活動、あ

の種の基準達成活動，すべて農民が負担しなければ
ならないのだ。)

例16は，農民達を苦しめる各種の税金，負担金の
多いことへの反発や不満の感情を表す「順口溜」で
ある。

5. 「順口溜」の特徴

「順口溜」が庶民に喜ばれる理由は権力者や社会
の歪み現象を風刺・批判することによるだけではな
い。「順口溜」自身の構造や表現手法がたいへん面
白いことも理由の1つとなる。「順口溜」は5言7
言などの律詩と違い，独特な表現手法がある。強烈
な世相風刺の表現，はらはらと笑うような滑稽の表
現，面白い比喩の表現，音韻や語呂のうまい表現な
どが「順口溜」の代表的な特徴である。

「順口溜」は句数などの構造にしても，風刺批判
の表現手法にしても独特な風格がある。これは5言
7言の律詩や曲付きの「民歌」などと大きく違って
いる。たとえば，字数や句数については，律詩の場
合だと制限が厳しく，勝手に増やしたりすることが
できないのである。「民歌」の場合も同様で，曲の
関係で句数を勝手に増やすことができない。しかし，
「順口溜」は律詩や「民歌」のような制限がなく，訴
える内容に応じて，句数や字数を自由に増やすこと
ができるのである。また，律詩の場合だと，句数や
字数の制約で世相に対する批判も十分に表現できな
い場合が多い。「民歌」の場合も音楽の制約で，世
相に対する批判は思う通りに展開できない。また，
歪みの社会現象への批判よりも，自分の感情をいか
に相手側に伝えていくかを優先させる傾向が強い。
しかし，「順口溜」はこのような制約がなく，物事や
世相に対する批判が自由に展開できるのである。さ
らに，律詩や「民歌」の場合は滑稽の表現があまり
多く使われない側面があるが，「順口溜」の場合は
滑稽の表現こそが重要な表現手法の1つとなり，こ
の滑稽な表現こそが人々を喜ばせる大きな要因とな

っている。このように「順口溜」は律詩や「民歌」
などに比べれば，構造にしても表現手法にしても大
きな違いがある。

5-1 風刺・批判の表現の多用

「順口溜」の特徴としては，まず第1に，風刺・批
判の表現の多用を挙げることができる。「順口溜」
は社会の歪みの現象に対して風刺・批判を行うのが
基本である。この風刺・批判の手法の運用は「順口
溜」の表現風格の最も代表的な特徴の1つである。
この風刺・批判の性格があつてこそ「順口溜」が
人々に歓迎されているのである。例えば，

例17. 村騙郷，郷騙県，一級一級往上騙，一直騙到
国务院。国务院下文件，一層一層往下念，念
完以後下飯店。³⁶⁾

(村は郷を騙し，郷は県を騙す。上級機関に対し，
級毎に騙していく。最後に中央の国务院まで騙して
いく。国务院からは指導文書を下す。文書が各級に
伝達されていく。伝達が終われば，飲み屋へ向かうの
だ。)

例17は中国の役人達のうち報告やうわべを繕うよ
うなやり方を風刺する「順口溜」である。現代中国
では役人達は自分たちの業績を高めるために，上級
機関に対してうその報告，吹聴，うわべを繕うとい
ったようなやり方を当たり前のように平気でやって
いる。大変深刻な状況となっている。このような風
潮はおおよそ50年代の後半頃から，蔓延し始め，今日
に続いているのである。例17はこのような役人達の
姿勢を風刺・批判しているのである。

「順口溜」は辛辣な批判も展開する。この辛辣な
批判の展開は「順口溜」の風刺の延長線となる。例
えば，

例18. 50年代人帮人，60年代人整人，
70年代人防人，80年代各人顧各人，
90年代見人就「宰」人！³⁷⁾

（50年代では人は人を助け合う。60年代では人は人をやっつける。70年代では人は人を警戒する。80年代では人は自分のことしか考えないようにする。90年代では他人をばるることばかりを考える。）

例18はそれぞれの時代の中国社会の歪みの現象の特徴を辛辣に批判しているのである。1950年代の中国では人々は誕生したばかりの共産党新政権に大きな期待を抱き、力を合わせて新しい社会を作っていたのである。しかし、1950年代後半の大躍進や反右派運動などで人々の願いが完全に裏切られていた。60年代の後半に入ると、文化大革命の運動が始まり、「階級闘争論」が主流となって、国民は政治理念や家庭出身などにより幾つかの階層集団に分類され、互いに批判したり闘争したりしていたのである。70年代の前半では4人組が政治を牛耳り、政治には自由な発言ができず、互いにうその意見表明を行っていたのである。80年代では毛沢東の政治路線が転換され、改革開放政策の実施により、経済活動が自由になり、人々は商売活動や金儲けに夢中となり、以前のように互いに意見を言い合う時間的な余裕がなくなり、興味関心も変わっていたのである。90年代では儲け主義や拝金主義がいつそう横行し、商売の信用や商品の品質を無視して、人からお金を取ればいいという風潮が蔓延していたのである。例18はこのような各時代の歪みの現象を辛辣に風刺・批判しているのである。

5-2 滑稽表現の愛用

「順口溜」の第2の特徴としては、滑稽表現の愛用である。「順口溜」は社会の歪みの現象に対する風刺・批判を展開すると同時に、はらはらと笑うような滑稽味を持たせるのも表現風格の最も代表的な特徴の1つである。この滑稽味があつてこそ、「順口溜」は面白くなり、人々の口から口へと伝えられていく。と同時に、日頃の不満やストレスの発散にもなるのである。例えば、

例19. 領導来了怎麼弁？甲魚王八饅一饅；
酒足飯飽怎麼弁？帶到舞厅轉一轉；
一身臭汗怎麼弁？桑拿池里涮一涮；
涮完以後怎麼弁？找個小姐按一按；
按出情緒怎麼弁？拉出小姐幹一幹；
幹完以後怎麼弁？找個大款算一算；
算完以後怎麼弁？給個工程換一換；
老婆知道怎麼弁？克林頓咋弁咱咋弁！³⁸⁾

（指導者が来たら、どうしたらいいのか。スッポン料理を味わってもらうのだ。食事が終わったら、どうしたらいいのか。ダンスホールへ連れて行けばよいのだ。ダンスして汗を流したら、どうしたらいいのか。サウナに案内すればよいのだ。サウナが終わったら、どうしたらいいのか。マッサージの女を呼んだらよいのだ。マッサージされて、その気になったら、どうしたらいいか。女を連れ出して、夜を共にさせたらよいのだ。共に夜を過ごし終わったら、どうしたらいいのか。成金を呼んで、支払わせたらよいのだ。支払いが終わったら、どうしたらいいのか。代わりに工事を受注させたらよいのだ。奥さんにばれたら、どうしたらいいのか。クリントン大統領の真似をしたらよいのだ。）

例19は役人幹部たちの腐敗を風刺・批判する「順口溜」である。生き生きとした描写で、笑えるように笑えない役人達の腐敗現象を批判しながら、面白みを感じさせている。周知の通り、クリントン大統領は在任中に異性のスキャンダルを起こし、世界的な話題となっていた。これを「順口溜」に織り込ませ、滑稽味を持たせているのである。

5-3 比喩表現の常用

「順口溜」の特徴としては第3に挙げるのは比喩の表現である。比喩表現は決して「順口溜」の特有の表現ではない。どんな文章形態にでも使える表現手法である。しかし、「順口溜」においてはこの比喩表現の使用がきわめて多く、大変目立っている。この比喩表現が多く使用されてこそ、「順口溜」が

人々に喜ばれていると言っても過言ではないであろう。用例を見てみよう。

例20. 桌前黑脸像包公,
酒席桌上红脸像关公,
回家路上摇摇晃晃像济公。³⁹⁾

(役所のオフィスでは「包公」のように黒顔をしているが、宴席では「関公」のような真っ赤な顔となり、帰り道では「済公」が雲の上を歩くようによろとなる。)

例20で示しているように各句とも比喩表現を使い、役人たちの飲み食いの醜態を風刺・批判している。

例21. 吹牛皮像驴叫一样, 奉承领导像巴儿狗一样,
训斥下级像老虎一样, 公款吃喝像恶狼一样,
见便宜跑得像兔子一样, 干工作像猴子一样。⁴⁰⁾

(ホラを吹く時にはロバの鳴き声のように叫び、上級機関への奉仕の時にはチンのようにおとなしくなり、下級への叱責の時には虎のように怖くなり、公金での飲み食いの時には狼のように貪り、目先の利益を取る時にはウサギのように素早く走り、仕事をやる時には猿のように逃げまわることになる。)

例21は各句で「像……一樣(のように)」の比喩表現を使って、役人たちの醜態を風刺している。

5-4 音韻リズムの活用

句末に音韻リズムを踏むのが中国語詩歌の特徴の1つである。「順口溜」もその句末においてほとんどの場合は音韻が踏まれている。この句末の音韻リズムは、「順口溜」の面白さ、覚えやすさをいっそう強める役割を果たしている。漢詩などでは、句末に同一の韻母を使用して音韻リズムの強化を図ったりしているが、「順口溜」もよく同じ手法を使っている。漢詩などの詩歌においては奇数句ではとくに音韻を踏まずに、偶数句だけ踏むのが代表的な音韻の踏み方である。「順口溜」の場合もこのような踏み

方がある。次の用例を見てみよう。

例22. 少女誠可貴, 少妇价也高,
若有富婆在, 两者都可抛。⁴¹⁾
(少女はとても可愛い。若い奥さんもととても上品。
しかし、セレブがいれば、どちらも要らないのだ。)

例22は金銭次第の男女関係の歪み現象を批判している「順口溜」である。4句で構成され、囲いで示しているように、偶数句の第2句、第4句の句末だけが韻母「ao」の音韻リズムを踏んでいる。奇数句の第1句、第3句の句末では特に踏んでいない。これは漢詩などの詩歌の代表的な音韻リズムの踏み方である。しかし、「順口溜」の場合はむしろこのような音韻リズムの踏み方の用例が少なく、下記のように各句の句末に音韻リズムを踏む用例の方が多いのが明らかである。これは「順口溜」の句末音韻リズムの特徴の1つとも言えよう。

「順口溜」では句数の制限がなく、必要に応じていくらかでも増やすことは可能である。句末音韻リズムもこれに対応して、2句あるいは数句ごとに同一韻母を使用して音韻リズムを踏んでいく。次の用例を見てみよう。

例23. 男人不坏, 有点变态。
男人不骚, 是个草包。
男人不花心, 绝对有神经。
男人不流氓, 发育不正常。⁴²⁾

(男は悪くならなければ、変態とされる。男は色気に興味がなければ、阿呆とされる。男は浮気をしなければ、精神病患者とされる。男は下品なことをしなければ、発達遅れとされる。)

例23は8句から構成され、8句とも句末の音韻リズムを踏んでいるが、第1句、第2句の句末では韻母「ai」、第3句、第4句の句末では韻母「ao」、第5句、第6句の句末では鼻音の「in, ing」、第7句、第8句では韻母「ang」の音韻リズムを踏んでいる。

伝統的な男女関係の倫理道徳が変化している社会を批判している「順口溜」である。

例24. 男人脑子都坏[掉], 每天给我送钞票[票],
还要排队任我[挑], 自己一直不会[老]。⁴³⁾

（男たちの頭はすべてだめになり、毎日のようにお金を持ってくる。さらに列に並べさせて選ばせてもらう。自分は一生涯老いにならないようになる。）

例24は4句で構成されているが、4句とも句末に同一の韻母「ao」の音韻リズムを踏んでいる。金銭しか考えない歪みの社会現象を風刺している。「順口溜」の句末の音韻リズムは「a」が入っている韻母使用の用例が他の韻母の用例に比べて突出している。「順口溜」句末音韻リズムの特徴的傾向の1つとも言える。これは「a」の発音は口が大きくてよく通ることによって音韻リズムの効果を上げるのに適しているからであろう。

「順口溜」の風刺・批判の多用、滑稽表現の愛用、比喩表現の常用、音韻リズムの活用などの特徴は決して現代の「順口溜」のみのものではない。古代からこの特徴を持ち続けている。風刺、比喩、滑稽、音韻などの表現があってこそ「順口溜」になるのである。それらの表現がなければ、「順口溜」として見なすことができず、他の分類項目になる。

6. 結

本論は中国の大衆口頭文学の1種である「順口溜」について考察した。上記の考察を通じて、およそ下記のようなことが言えよう。

①「順口溜」が大量に創作された背景には中国の社会は大きな変化が起きていたからである。これは歪みの社会現象に対する庶民たちの不満や怒りの現れである。

②「順口溜」ということばは比較的新しいものである。日本語に置き換える時にはなかなか適切な訳

語は見つからず、「当世ざれ歌」の訳語にすれば、比較的原文の意味に近いと言える。

③「順口溜」に近似していることが多数存在している。混同して使っている場合が多いが、意味的にはやはりそれぞれ微妙な違いがある。本論ではこの微妙な違いについて考察し、その区別を筆者なりにはっきりさせてみた。たとえば、「歌」「謡」「歌謡」については、「歌」は歌うものであり、「謡」は歌わないものである。両方を指す時には「歌謡」を使う。

④「順口溜」は用語としては比較的新しいが、社会の歪みを風刺・批判する大衆口頭文学としてはけっして新しいのではなく、2000年前の古代にもその原型が見られる。

⑤「順口溜」は独特な特徴を持っている。風刺批判の多用、滑稽表現の愛用、比喩表現の常用、音韻リズムの活用などがその代表的な特徴である。この特徴は古代から一貫して続いていると言える。この特徴があつてこそ「順口溜」が人々に喜ばれているのである。

注

- 1) 中国2013年度統計公報, 中華人民共和国国家統計局による。http://www.stats.gov.cn/。
- 2) 深圳市2013年国民経済・社会発展統計公報, 深圳市統計局による。http://www.szjtj.gov.cn/。
- 3) 中央紀律検査委員会が2012年11月19日に第18回党大会で報告した報告書による。
人民網 http://www.people.com.cn/。
- 4) 人民網 http://www.people.com.cn/ による。
- 5) 岡益巳著,《現代中国と流行り謡》, お茶の水書房, 1995年, p16。
- 6) 同上5) のp16。
- 7) 同上5) のpp16-21。
- 8) 同上16) のpp22-25。
- 9) 崔希亮著,《中国人文世界与漢語熟語》, 北京語言文化大学出版社, 1997年, pp1-2。
- 10) 愛知大学編, 増訂第二版《中日大辞典》, 大修館書店, 1992年, p1735。

- 11) 商務印書館・小学館編,《中日辞典》,小学館,1992年,p1345。
- 12) 朱自清著,《中国歌謡》,復旦大学出版社,2005年,p1による。この書物は朱自清が1929-1931年に大学で講義した原稿を作家出版社が1957年版に整理して出版したものである。復旦大学出版社は2005年に校訂して再版した。
- 13) 呉超著,《中国民歌》,浙江省教育出版社,1996年による。
- 14) 同上12)のpp13-22。
- 15) 同上12)のpp37-50。
- 16) 同上1)のp42。
- 17) 鐘敬文(1903年-2002年),中国の民間文学・民俗学の開拓者,中国民間文学芸家協会主席・中国民俗学理事長を歴任,中山大学・浙江大学・北京师范大学の教授歴任。
- 18) 段宝林著,《中国民間文学概要》,北京大学出版社,2002年による。
- 19) 《詩経》は中国最古の詩集,孔子(紀元前551-479)の編とされている。収録されたのは紀元前11世紀から紀元前6世紀頃までの500余年間の詩311篇,内6篇は詩題のみ。現在伝わっている《詩経》は,毛という人が伝えたとされているので,《毛詩》《毛伝》とも言う。
- 20) 金啓華訳注,《詩経全訳》,江蘇古籍出版社,1984年,p237。
- 21) 宋・郭茂倩著,《樂府詩集》,中華書局出版社,1979年,p567。
- 22) 楊慎(1488-1559),字は用修,号は昇庵,四川省・新都の生まれ。1511年に殿試で第1位を獲得し,翰林院修撰に授与された。1524年,世宗帝の意見と対立して,雲南に左遷され,死ぬまで雲南に30余年間も任官された。詩が好きで,2300首余も創作したとされる。
- 23) 1881年『函海』刊本,《古今風謡》「中国風土志叢刊(12)」広陵書社,2003年影印本,p12。
- 24) 同上29)のp27。
- 25) 清・杜文瀾著,周紹良校正,《古謡諺》,中華書局出版社,1958年,p68。
- 26) 同上31)のp372。
- 27) 雑誌《歌謡》第1号,北京大学歌謡研究会1922年12月発行。《中国民間文学大辞典》鐘敬文名譽主編,竜江人民出版社,1996年,p1711からの引用。
- 28) 週刊誌《歌謡》第5号,1923年1月発行。《中国民間文学大辞典》鐘敬文名譽主編,黒竜江人民出版社,1996年,p1714からの引用。
- 29) 郭沫若,周揚主編,《紅旗歌謡》,紅旗雜誌出版社,1959年。鐘敬文名譽主編,《中国民間文学大辞典》,黒竜江人民出版社,1996年,p1724からの引用。
- 30) 搜房ネット,
http://suzbbs.soufun.com/1822064721~1/1967864_1967864_1.htmによる。
- 31) 同上30)。
- 32) 趙曉蘭著,《歌謡学概要》,電子科技大学出版社,2005年,p187による。
- 33) 百度ネット,<http://www.baidu.com/>による。
- 34) 西祠胡同ネット,<http://www.xici.net/b41869/d1800166.htm>による。
- 35) 百度ネット,<http://www.baidu.com/>による。
- 36) 「中国選挙と治理」,<http://www.chinaelections.org/NewsInfo.asp?NewsID=104796>による。
- 37) 「十三郎小学教学網」,<http://www.xsjxw.com/blog/user1/6/archives/2006/20061026191217.html>による。
- 38) 「北大中文論壇」,<http://www.pkucn.com/chency/thread.php?tid=3372>による。
- 39) 新華網<http://www.bj.xinhuanet.com>による。
- 40) 西祠胡同ネット,
<http://www.xici.net/d13511631.htm>による。
- 41) 搜狐網,
<http://wenwen.sogou.com/z/q28675821.htm>による。
- 42) 百度網,<http://zhidao.baidu.com/link?ur>による。
- 43) 百度網,<http://hi.baidu.com/trbkiewxltbajkq/item/7960b8546575663f33e0a99b>による。

主要参考文献

- 岡益巳著,《現代中国と流行り謡》御茶ノ水書房,1995年。
- 甘棠著,《中国大陆の順口溜(正集・続集)》中国大陆問題研究所,1988年。

周一民著，《北京俏皮話辭典》北京燕山出版社，1992年。

謝貴安著，《中国諺文化－諺諺与古代社会》華中理工大学出版社，1994年。

樹建，左愚著，《当代順口溜与社会热点掃描》中国档案出版社，1994年。

張守常著，《中国近世諺諺》北京出版，1998年。

段宝林著，《中国民間文学概要》，北京大学出版社，2002年。

朱自清著，《中国歌謠》，復旦大学出版社，2005年。

愛知大学編，増訂第二版《中日大辭典》，大修館書店，1992年。

商務印書館・小学館編，《中日辞典》，小学館，1992年。

陳原著／松岡栄志編訳，《中国のことばと社会》大修館書店，1992年。

常敬宇著，《漢語詞彙与文化》，北京大学出版社，1995年。

余雲華著，《口頭禪》，河北人民出版社，1997年。

何群著，《民謠語》，新華出版社，1998年。

About Chinese Contemporary Doggerel

NAKAFUMI Soyuⁱ

Abstract : This paper discusses the Chinese expression “shun kou liu,” translating it as “contemporary doggerel.” “Shun kou liu” is not an old expression. It is comparatively new. Older words with almost the same meaning include “geyao (doggerel),” “minyao (folk rhyme)” etc. These words have subtle differences in meaning. However, people do not always use them with clear distinctions. Due to this situation, this paper will discuss and clarify the definition of “shun kou liu,” the contents associated with “shun kou liu,” the difference from other words, works of “shun kou liu” in ancient and modern times, and the features of “shun kou liu” which remain consistent from ancient times.

Keywords : “shun kou liu”, song, ballad, doggerel, folk rhyme, contemporary doggerel, pop ballads, Yuefu folk songs

ⁱ Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University